

格助 四段・已 接続 四段・用(撥音便) 係助
と のたまへ ば、薩摩守喜んで、「今は西海の

格助 格助 四段・未 四段・命 格助
波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさ

格助 四段・命 格助 四段・体 格助 四段・未 打消「ず」終 接続詞
ばさらせ、浮き世に思ひおくこと候はず。さらば

格助 四段・用 接続 格助 格助 格助 格助 格助
いとま申し。とて、馬にうち乗り 甲の

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
緒を締め、西をさいてぞ歩ませ 給ふ。三位、

格助 格助 四段・用(促音便) 四段・未 存続「たり」已 格助 格助
後ろをはるかに見送つて立たれたれば、忠度の

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
声とおぼしくて、「前途ほど遠し、思ひを雁山の

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
夕べの雲に馳す。」と、高らかに口ずさみ 給へば、

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
俊成卿、いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへて

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
ぞ入り 給ふ。そののち、世静まつて千載集を

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
撰せられけるに、忠度のありしありさま、言ひ置き

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
し言の葉、今さら思ひ出でてあはれなりければ、

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもあり

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
けれども、勅勤の人なれば、名字をばあらはさ

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
れず、故郷の花といふ題にて詠まれたりける歌

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
一首ぞ、「よみ人知らず」と入れられける。

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
さざなみや 志賀の都は 荒れにしを

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
その身、朝敵となりにし上は、子細に及ばず

格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助
と言ひながら、うらめしかりしこともなり。

とおっしゃると、薩摩守は喜んで、「今は西海の

しかばねをさらす
のならさらしてもいい。このつらい世に思い残す

ことはございません。それでは
お別れを申しあげます。」と言って、馬に乗り、甲の

緒を締め、西を指して(馬を)歩ませなされる。三位は

後姿を遠くなるまで見送つて、立っていらつしや

ると、忠度の
声と思われて、「これから先の旅路は遠い、

途中で越えるあの雁山の
夕暮れの雲に思いを馳せる。」と、高らかに

吟じられたので、
俊成卿は、ますます名残惜しく思われて、

涙を抑えて
(門の中に)お入りなされる。その後、世の中が

落ち着いて、(俊成卿が)『千載集』を
お選びになった時に、忠度の生前の様子、言い残し

た言葉を、今更のように思い出してしみじみと
感慨深かったので、

あの巻物の中に、(勅撰集に入れるのに)ふさわしい
歌はたくさんあつ

たが、(忠度は)天皇のおとがめを受けた人なので、
姓名を明らかに

ならず、故郷の花という題でお詠みになった歌
一首を「よみ人知らず」としてお入れなされた。

(昔の)志賀の都は、荒れ果ててしまったが、
長等山の山桜は昔のままに

美しく咲いていることだよ
には、あれこれ言えるものではない

とは言つものの、残念なことである。